コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2023年1月21日

BMJ:

オミクロン新派生株XBB.1.5って、ヤバイんじゃないの？

【松崎雑感】

それほどやばくないようです。ワクチンをしっかり打っていれば、重症化しないと言われています。しかしながら、高齢の方々が感染したなら、死亡リスクは高いので、高齢の方々に感染しないようにしっかり対策を続けることが大事です。

何兆円も「余計な費用」が掛かることがいやなので、新型コロナをちょっと厄介な風邪とみなす政策変更が言われていますが、ちょっと厄介どころか、引き続き、現在の対策を続けるべき感染症だと思います。「命よりもお金」＝「年寄りは早く死ね」と言う選別思想がじわじわと広がっているようです。私は反対です！

松崎道幸　道北勤医協ながやま医院　matsuzaki-m@dohoku-kinikyo.or.jp

オミクロン新派生株XBB.1.5って、ヤバイんじゃないの？

Mahase E. Covid-19: What do we know about XBB.1.5 and should we be worried?. *BMJ*. 2023;380:p153. Published 2023 Jan 19. doi:10.1136/bmj.p153

XBB.1.5とは何か？

XBB.1.5はXBBとXBB.1から生まれたオミクロン株のあらたな派生株である。この3年間、人類は、多くの変異株に襲われて来たが、この変異株は、様々な変異株のごった煮（スープ）から抜きんでて登場したため、専門家らは「クラーケン」という怪物のあだ名をつけている。（クラーケン：ノルウェーとアイスランド沖の深海に住むとされる伝説上の巨大生物。実在の巨大イカであるダイオウイカ(giant squid)がモデルではないかと考えられている。伝説では船を襲って沈めるとされる）　Xと言う文字は複数のウイルス（この場合BA.2.10.1とBA.2.75）の遺伝子組み換えによって発生した株（mix）であることを示している。

UCL Genetics Institute所長でコンピュータ生物学教授フランソワ・バルー氏は、「XBB.1のスパイク蛋白にF486Pと言う変異が加わったものがXBB.1.5だが、この変異によってXBB.1.5の免疫すり抜け機能はXBB.1より若干低下したが、感染力が強くなっている。これはヒト細胞のACE2受容体への結合力が強くなっているからだろう」と説明している。

XBB.1.5はどこで流行しているのか？

WHOはXBB.1.5が38国で検出されていると報告している。

英国健康安全保障庁（UKHSA）は、この二つの変異株のうちどちらかがイギリスで流行するだろうと考えているが、昨年12月末の新型コロナサーベイランスでは、これらの株の占める割合は5%以下だった。UKHSAは、XBB.1.5が免疫すり抜け力とヒトの細胞への侵入力が高いため感染リスクも増していると指摘し、現在の波がおさまった後に、XBB.1.5が増加すると思われるが、その裏付けとなる情報はまだ得られないと語った。

一方、欧州CDCはXBB.1.5が欧州地域で主流行株となる可能性は中くらいで、もし流行するとすれば、その時期は1～2か月後になるだろうと述べた。

米国CDCは、XBB.1.5が国内で急速に広がっており、1月はじめには28%がこの株に置き換わるだろうと述べている。

バル―氏は「かねてからXBB.1.5が世界中に広がると心配されてきたが、まだ本当にそうなるかどうかはわからない」と語った。

重症化リスクは高いのか？

現在検討中である。しかし、WHOはXBB.1.5には「重症化リスクを高めるような変異が起きていない」と語った。欧州CDCも同じ見解であり、これまでに流行しているオミクロン株の派生株よりも重症化リスクが高いという所見はないと述べている。

従来のワクチンはXBB.1.5に効くのか？

XBB.1.5に関するデータはまだない。しかしWHOは、XBB.1.5がこれまで流行した中では最も免疫回避能力の高い新型コロナウイルスであると警告している。ワクチン免疫＋自然感染免疫と言う「ハイブリッド免疫」があっても、XBB.1.5.5に対する高い中和抗体価が獲得できないことが分かっている。（モデルナあるいはファイザーのmRNAワクチンを3～4回接種し、BA1に感染した人々、あるいは中国製ワクチン3回接種し、BA.1 、BA.5、BF７に感染した人々における検査結果が示している）

欧州CDCは、ワクチン接種歴があっても、XBB.1.5の親株のXBBとXBB.1に対する中和抗体価は明らかに低いことを指摘している。しかし、欧州CDCは、従来のワクチン接種を完了していれば、現在欧州で流行中のオミクロン株による重症化を十分抑えることができると述べている。

ただし接種から時間が経つと効果は低下する。
現在のところXBB特異的ブースターワクチンが必要かどうかは結論が出ていないが、専門家は必要となる事態が起きることを想定して、製造の準備をしておいた方が良いと主張している。

XBB.1.5は懸念すべき変異株なのか？

現在多くの研究者がデータ解析中だが、専門家は今のところこの株が懸念変異株として警告を出す必要はないと考えている。

オクスフォード大学感染免疫教授アンドリュー・ポラー氏は本誌に「新しい変異株が発生するたびに過剰な怖れを抱くことはやめた方が良い。XBB.1.5がこれまで発生しては消えていったどの変異株よりも重症化リスクが高いと考えるべき根拠はない。イギリスで必要なことは、コロナに限らず、すべての病気の発見と治療、ケアを適切に行うことのできる医療体制を作り上げることだ」と語った。

さらに彼は「イギリスが直面しているのは、新型コロナ変異株の問題ではない。コロナは多くの感染症のひとつに過ぎない。医療資源、資金、スタッフの慢性的不足がわれわれの医療とソーシャルケアシステムに大きな障害をもたらしている。この冬に感染症のウエーブを乗り切れるか、進行する高齢化にどう対処するか。新型コロナであれば、科学研究によるブレイクスルーと短期的対策で何とか乗り切れるが、イギリスの抱える医療問題全般を改善するには長期間の政治的努力が必要だ」と付け加えた。